

る状況が見られる。

これらの擬人化は、それぞれ時代も社会も異なっており、同時に論ずることは困難かもしれないが、冒頭に述べたように、人間が外界を見るための一つの装置としてとらえたとき、何かしらの共通点が見出せるはずである。

さて、擬人化表現が行われる理由の一つとして挙げられるのが、アニミズムである。万物には魂が宿り、それらへの崇敬の念も込められるのがアニミズムの思想だ。表題の擬人化における信仰心とは、すなわちアニミズムでは、と考えてもおかしくない。

確かに、草木や動物、器物、有情無情のすべてのものに魂があるという前提をとれば、人間はそれらと対話をする、それが擬人化だ、といってしまうことも可能である。

しかし、果たしてそれだけが答えだろうか？

言い換えると、アニミズムの思想を動かしている感情、それは何だろうか。

万物に魂が宿るといっても、我々はそこに「平等に」魂の存在を感じることはない。手元にある紙切れ一枚、電灯、……それらにはほとんど、いや全くといっていいほどそれを感じない。世界中の人々が全員そうであるとは限らないが、少なくとも、現代の日本人で、常に森羅万象に魂がやどることを意識している人はほとんどいないであろう。

ではいつ、どのような条件でスイッチが入るのか。そこで浮かんでくるのは「ものがかたる」ストーリー、物語である。「ものがかたる」という仕組みに気づいた（を生み出した）我々

は、同時に「ものにかたらせる」という仕組みも手に入れる。共感したい、すがりたい、もつと率直に言う感動したい、という人間の生の感情が、あるストーリーをものに象徴させ、ものにかたらせはじめる。この生の感情が信仰心の要素と似通っていることは言うまでもない。

はやぶさの物語、陸前高田の松、杜若のシテ、そこに自分の何かを重ね合わせ、共感と安堵を得ようとする人間の情動が見える。一方、興味がおもしろみの方向へ向くと、妖怪や、いわゆる萌え系の擬人化となるといえる。

擬人化によって、有情無情のすべてのものが語り始める。またそれは、人間とその外界を結び付ける重要な手段なのである。

沖縄の抱護と集落の位置関係

鈴木 一 馨

「抱護」とは沖縄県域（旧琉球国域）において集落や住居などを囲う構造であり、福建にて「地理」を学んだ蔡温（一六八二—一七六二）によって提示されたものと考えられる。

蔡温は康熙四十七年（一七〇八）から同四十九年（一七一〇）までと、康熙五十六年（一七一七）から同五十七年（一七八一）までの二度、福州に滞在し諸学と並んで風水を学んでいる。この間に学んだと思しき明代の万曆十一年（一五八三）に徐善繼・徐善述の撰述した『地理人子須知』に使用されている

圍繞の状態を意味する「包護」から、圍繞の構造を意味する「抱護」概念を作ったものと考えられる。

抱護の役割については、風水にかかる言説も時折見られるが、実際の抱護の形状や構造にもとづくものではなく、伝承を再確認しているに留まっている嫌いがある。これに対して、具体的な役割の説明としては、防風、防潮、防火、土砂の流出予防、適度の温度・湿度の保持などが挙げられ、ほとんどの場合、土地・気象条件の観点からの意味付けがされている。これは近代的な抱護の研究が、集落に直接する樹林を中心に、地理学や建築学・林学の方面から行なわれてきたことと無関係ではないだろう。

これまで、沖縄県内各地で調査した結果からすれば、抱護と集落との位置関係はおおよそ二種あると考えられる。その一つは、抱護が直接集落に接する場合で、集落を圍繞する樹林として形成されることがほとんどである。この場合、先掲の土地・気象条件からの意味付けは、おおよそ的を得ていると言える。

もう一つが、抱護と集落との間にある程度の空間を挟んでいる場合で、集落を圍繞する山嶺を抱護と見なしている場合が多いが、また海岸集落でかつ海岸から離れた位置にあるいくつかの集落について、浜抱護が形成されている例が見られる（恩納村安富祖など）。この場合、浜抱護は防風・防潮の役割を全く果たしておらず、抱護を単純に土地・気象条件の観点からの意味付けで理解しきることには問題があると言える。

同治三年（一八六四）に行なわれた与儀通事親雲上鄭良佐による八重山の風水検分の報告である『北木山風水記』の四村風

水記では、四箇村（現在の石垣市街地）について、「本島満勢嶽を按ずるに、背去して抱護の情無し。野底山を皆ぶるは、廻環して抱護の情有り」とあって、遠方にある山嶺が四箇村を圍繞することによって抱護が保たれていることを記しているが、実際にはこの山嶺は四箇村の位置からはほとんど見られず、また四箇村そのものが別に樹林に囲まれていることが旧温故学会所蔵の「八重山古地図」（明治初期）より判明しており、間接的な抱護と直接する抱護の二種が備わっていることが理解できる。ここでは野底山を中心とする間接的な抱護（山嶺）が北・北東の風をある程度防いでおり、気象条件としての意味を持っており、直接的な抱護はこれを補強するものと考えられる。

ただし、蔡温の『杣山法式帳』には「亦山氣之不漏様諸山之相圍候を抱護と申候」とあり、「氣」の流出を防ぐという役割により意味があるのではないかと考えられる。

なお、本発表は平成十九―二十年科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「東アジアの伝統的地理思想よりみた沖縄の抱護林」（課題番号一九六五二〇七三。研究代表者、澁谷鎮明）、平成二十一―二十三年科学研究費補助金基盤研究（B）「沖縄の集落空間における伝統的的人工林『抱護』の形態と機能に関する研究」（課題番号二二三六〇三〇〇。研究代表者、浦山隆一）、ならびに平成二十二―二十四年度科学研究費補助金基盤研究（B）「沖縄の固有文化が持つ環境観と空間形成技術から見る集住環境の構成原理に関する研究」（課題番号二二三六〇二五七。研究代表者、鎌田誠史）による研究成果の一部である。